

## デジタル技術高度化による『学校一覧』原本所蔵価値の向上

所澤潤 / 立正大学 教授、群馬大学 名誉教授

今、デジタル技術高度化の進行に伴って、『学校一覧』の原本所蔵の価値が理解される、といういささか逆説めいたことを書きたいと思う。

日本においては、資料の現物保存は、財政的な仕組みのせいだと思うが、図書館でも博物館でも多くの施設で苦しい。2023年は、国立科学博物館が資料保存経費確保のためにクラウドファンディングを行ったことで、その苦しさが全国に知れ渡った。学術的価値は高いが、地味な資料群である滋賀大学所蔵の一群の『学校一覧』はどうだろうか。

阿部安成氏編の「彦根高等商業学校収集資料のポリテクス」(『彦根論叢』第344・345号、2003年11月)に、私も論考を執筆したが、私の意図は、『学校一覧』の存在意義を論じることによって、保存の価値を訴えようとするものだった。そのため、解明されていなかった『学校一覧』の起源と明治初年のお雇い外国人の関わりも明らかにした。そして『学校一覧』が結果的に旧学校制度の情報の公開と蓄積を保障するという意義をもったことも指摘した。しかし、拙稿の記述だけでは、多数の原本を所蔵公開する重要性を解き明かせていなかったため、本稿ではデジタル技術の高度化によって、もともとあった原本所蔵の価値が顕在化したことを述べることにしたい。

それより以前、私の勤務していた群馬大学では沿革資料、図書資料が様々な形で廃棄圧力を受けていたので、学内で、私は対抗する2つの次のような論理を展開していたが、第1の方は古参の教員から納得が得られることがあっても、第2の方は必ずしも納得が得られなかった。その意味では原本廃棄圧力を吹き飛ばしそうなデジタル技術の高度化の脅威は驚くべきものである。

第1に、古い図書を所蔵していること自体が、新設大学にはできない優位な点だ。そうした資料を失えば、長い歴史を持つ国立大学は、新興の公私立大学と同じ土俵で競わなければならない。それを放棄することはありえない。もともと重要な資料でもあるのに、それをいま予算が付きにくいという根拠で放棄して良いのか。

第2は、教育的視点である。県内に充実した図書館が少ない地方大学こそ、学生に大量の図書の実物を目にする機会を提供することが不可欠だ、というこ

とだった。1990年代末だったと思うが、群馬大学図書館職員たちが、概算要求の際だったか、監督官庁の担当者から地方大学の図書館には目録だけあれば良い、所蔵大学から借り出せば良いと言われて困惑していた時であった。

当時の、原本所蔵を不要とする論理は、『学校一覧』を例にして言えば次のようなものであった。全国の大学図書館に分散的に所蔵されているものを、各図書館が共通コードで画像公開すれば、誰でも手元の端末で瞬時にアクセスできる。それなら原本は、災害などに備えるにしても国内に少数あれば十分になる。それこそ、最新の技術を活用した先進的な社会のあり方だ。

しかし今、技術の進歩は、原本こそ大切だ、ということを決定的にしている。すなわち誰かが画像を加工していないか、という問題で現れたのである。幸か不幸か、自然科学の領域での画像の改竄、捏造が日本国内に限っても次々と発覚しているので説得力がある。

ただ、文系の場合、理系と少し違うかもしれない。自身で改竄・捏造をする意図がなくても、改竄・捏造された資料を知らずに使用してしまうおそれがそれなりに高いからだ。正規のサイトのハッキングによる画像の改竄・捏造や、偽サイトでの改竄・捏造画像に出会うかもしれないのである。『学校一覧』であれば、刊行されなかった年度のものや、ある学校の在籍学生・生徒名が書き替えられたものに出会ったりするかもしれない。復刻本における善意の誤植訂正も我々を悩ませる問題だが、それがオンライン化されれば見分けるのが一層難しい。稀少図書の画像が私的なサイトで公開されている場合、実在と信じてよいかという問題もある。

多数の画像の集中的なオンライン活用は、研究の際に、従来にない発想を得るのにはかなり有用で、今後もそうあり続けるだろうが、加工されていない情報であることを確認する段階が、今よりもはるかに重要になる。大量の図書資料群を一冊一冊細部まで照合することが必要だからだ。その機会を提供できる資料保存機関が存在しなければならない。『学校一覧』もその1つだが、滋賀大学経済学部が、既にその所蔵する『学校一覧』を1,300点以上すべて目録化したことは、その準備活動の一端のようにさえ感じられる。

原本のデジタル化保存公開の技術が高度化すればするほど、原本所蔵の価値が高まっていく。